東京未来大学

研究推進ニュースレター

Vol.11

東京未来大学
研究推進委員会
2020年3月31日発行

科研費ニュース

令和2（2020）年度東京未来大学の科研費申請状況は以下の通りです。

		令和2年度						令和元（平成31）年度					
		こども（保育・教育）		こども（心理）		モチベーション行動科学部		こども（保育・教育）		こども（心理）		モチベーション行動科学部	
		件数	金額										
基盤研究（A）	一般	1	47,098	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	海外学術調査	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
基盤研究（B）	一般	1	5,520	0	0	1	11,340	2	24,854	0	0	1	11,570
	海外学術調査	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
基盤研究（C）	一般	5	19,183	3	13,348	3	11,783	4	10,238	3	13,537	4	13,881
	特設分野研究	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
挑戦的研究	開拓	0	0	0	0	0	0	0	0	1	5,180	0	0
	萌芽	2	8,378	0	0	1	2,981	3	12,783	0	0	1	4,820
若手研究（A）													
若手研究（B）		2	6,454	1	5,000	0	0	2	5,821	0	0	0	0
件数 ／ 金額		11	86,633	4	18,348	5	26,104	11	53,696	4	18,717	6	30,271
合計件数		20 件						21 件					
合計金額		131,085 （千円）						102,684 （千円）					

令和元（2019）年度と比較すると、申請の合計件数はほぼ同じですが、合計金額が増加しています。これは、基盤研究(A)といった比較的大型の申請があったことが関連しています。近年、申請件数が増えていますが、本学の教員数からすれば、まだまだ少ないと言うべきでしょう。来年度は、さらに申請件数が増えることを期待したいところです。

ご自身の研究に合った種目を検討し、申請してください。詳しくは、日本学術振興会ウェブサイト内の科学研究費助成事業（科研費）の制度概要、「研究種目・概要」ページをご覧ください。

https://www.jsps.go.jp/j-grantsinaid/01_seido/01_shumoku/index.html

次年度科研費スケジュールと要領の詳細はまだ発表されていませんが、例年通りですと、9 月には日本学術振興会 HP で告知されると思いますので、ご確認ください。参考として、今年度のスケジュールを以下に示します。

＊公募開始：2020 年 9 月 1 日
＊学内期限：2020 年 10 月中旬
＊提出期限：2020 年 11 月上旬（厳守）

新任教員紹介

新企画として、新任の先生方について、研究テーマとその内容を通じて紹介いたします。記念すべき第１回は、島内晶先生にお話を伺いました。

今回は、このような機会を与えてくださいまして、どうもありがとうございます。恐縮ですが、私の研究についてお話させて頂きます。

私の専門領域は、生涯発達心理学、高齢者心理学です。その中でも、現在は、高齢者の記憶認識に着目し、研究を行っています。具体的には、自分の記憶に対しての認識である「メタ記憶」という概念を用いています。これは、「自分は記憶力がよい」とか、「最近物覚えが悪い」といったことに関連しています。高齢期になると、記憶の衰えを自覚することが増えてくるとされていますが、そのような経験がメタ記憶にどのように影響するのかといったことを検討しています。これまでに、高齢者にも適用可能なメタ記憶尺度の開発を行い、作成した尺度を用いて高齢者の精神的健康に影響を及ぼすと考えられている様々な心理的側面や記憶成績との関連について検討を行っています。

そもそも、私が、このテーマに着目するまでのことを少しお話しさせていただきます。もともとは、高齢者心理学にはあまり関心がなかったのですが、学部の時のゼミの先生に「百歳の人を対象とした研究がある」というお話を伺い、「百歳の人に会ってみたい！」と半ばミーハーな気持ちで、都内にある某研究所に足を踏み入れたことが、きっかけでした。研究所では、百寿者（百歳以上の人）研究のお手伝いをさせて頂きつつ、百歳以外の高齢者を対象としたさまざまな調査や健診に参加させて頂きました。実際に様々な高齢者の方と関わる過程で、「人が老いるとはどのようなことか」を目の当たりにし、「老いて生きていくこと」の意味を探究してみたいと考えるようになりました。また、どちらかというと応用的な側面の研究に携わることが多かったので、高齢者を対象とした、より基礎的な研究をしたいと思うようになりました。

中でも、「記憶」に着目したのは、高齢者にとって記憶の衰えにまつわる問題は、とても重要であり、時として、高齢者の日常生活に、そして精神的健康に影響を及ぼすと考えたからです。本来、一般的に、通常の加齢の過程でみられる記憶の衰えと、認知症など病的加齢でみられる記憶障害の症状とは質的に異なるとされていますが、記憶の衰え＝認知症？と考えている高齢者の方も多くいらっしゃいます。昨日の夕飯に食べたものが思い出せない、人の名前が出てこない（思い出せない）、といった体験が重なってくると、認知症になったのではないかと不安を訴え、記憶愁訴がみられる方もいます。しかし、脳の器質的な加齢変化はとめることはできないため、記憶力の低下を完全にとめることは難しいと考えられます。それでは、私たちは、記憶の衰えとどう向き合えばよいのでしょうか。

ところで、メタ記憶と実際の記憶成績とは関連がないことがこれまでも示されています。また、私が共同研究者と行った研究でも、メタ記憶における記憶の自信度を測定する尺度を開発し検討しましたが、高齢者の方が若年者に比べて、記憶に対する自信度が高いという結果がでています。これは実際の記憶成績は若年者の方が良いのにも関わらずです。一見、矛盾するようにも思えるこの現象は、「エイジングのパラドックス」の一つと考えられています。高齢期には、加齢とともに身体的機能や認知的機能など様々な面での低下が見られても、ウェルビーイングは比較的維持されているという現象です。私は、ここに高齢期をポジティブに生きていくヒントがあるように感じています。記憶能力は低下しても、記憶の主観的評価であるメタ記憶は保たれるのであれば、記憶の失敗にまつわるネガティブな感情だけにとらわれず、過ごしていく事が出来るのではないか、その様に考え、検討を進めています。

今後の展望としましては、現在新たにメタ記憶の別の側面を捉える尺度を開発しています。現時点では、詳細は控えますが、今後は、その尺度を用いて、記憶の失敗経験に対しての本人の意味づけをとらえ、第三者との評価のずれを検討していく予定です。認知症に罹っている高齢者の増加も非常に重要な問題となっていますが、現時点で認知症の確実な治療法はないため、いかに早期発見し対応していくかが求められています。現在開発中の尺度は、健常高齢者に加え、認知症（特にアルツハイマー病）の前駆症状であるMCI（Mild Cognitive Impairment：軽度認知障害）やさらにその前段階とされる症状を示す高齢者にも適応が可能であるよう検討しています。実現できれば、診断の補助手段として、あるいはそういった症状がある高齢者の心理的対応のヒントを示すことができるのではないかと思っています。さらには、展望というよりも野望に近いのかもしれませんが、基礎研究を重ね、年をとることにもポジティブな側面があるということを示していければと思っています。どうもありがとうございました。

令和元年度 東京未来大学特別研究助成研究発表会（成果報告会）

開催日：令和 2（2020）年 2 月 26 日（水）
時間：10 時 00 分　出口保行こども心理学部長挨拶（B-321 教室）
　　10 時 05 分　心理系発表（B-321 教室）、司会：平部正樹
　　10 時 05 分　非心理系発表（B-327 教室）、司会：小林久美

令和 2（2020）年 2 月 26 日（水）に、令和元（2019）年度東京未来大学特別研究助成研究発表会（成果報告会）が開催されました。午前 10 時、B-321 教室での出口保行学長による挨拶に続いて、B-321 教室で心理系、B-327 教室で非心理系の発表が行われました。発表件数は、全 13 件で、昨年度と同数でした。

以下に、今回ご発表いただいた先生方のお名前と申請課題（発表タイトル）を紹介いたします。また、この発表会における口頭発表以外の特別助成研究テーマや概要の一部を紹介いたします。

東京未来大学特別研究助成研究発表会　プログラム
B-321 教室　　（司会　平部正樹）

氏名	申請課題及び概要
近藤俊明 （出口保行）	小・中学校における不登校の機能分析に基づく予防的介入の研究
藤後悦子 （大橋恵、井梅由美子）	絵本を活用したスポーツ・ハラスメント教材の開発とその評価
	本研究ではスポーツ・ハラスメントの実態を踏まえ、ハラスメント環境の改善に向けて親を対象とした絵本教材を日本語版と英語版の 2 種類作成した。この絵本を用いて、親、大学生、指導者を対象とした効果検証を行った。
鈴木公啓	身体と装いの自他への影響とその心理機序（3）
	姿勢や歩行が自他の心理・生理面に与える影響，一般健常群のボディイメージ，過食などの病理の背景要因，そして，子どものダイエットの実態や背景要因などの研究をおこなった。
大橋　恵 （井梅由美子、藤後悦子）	地域スポーツにおける保護者の負担感とチームに対するサポートモチベーションの検討
	本研究は、地域スポーツ推進に欠かせない保護者によるサポートの促進要因の解明を目的とする。そのために、習い事に関するベネッセ調査の二次分析と、地域スポーツに子が参加中の母親 800 名対象の調査を実施した。
平部正樹 （藤後悦子、藤本昌樹、小林寛子）	通信制高等学校生徒に対するライフサイクルを見据えた支援方法についての研究
野中俊介	ひきこもり者の生活困難感を測定する尺度の作成と心理測定学的検討
	ひきこもり者の生活の質をアセスメントする尺度を作成するために，各 200 名のひきこもり経験者とひきこもり非経験者を対象に調査を行なった。分析の結果，20 項目の尺度が作成され，信頼性と妥当性が確認された。

東京未来大学特別研究助成研究発表会　プログラム
B-327 教室　　（司会　小林久美）

氏名	申請課題
紙本裕一	東京未来大学の「保教ブランド」の特徴づけに向けた情報学に基づく大学教員の研究基盤の批判的検討

篠原俊明	幼児における基本的な動きの横断的比較
	1985 年と 2019 年の幼児の基本的な動きの習得状況を比較した。今日の幼児は、経年的な動作発達が認められない動作が複数存在し、性別および年齢に関わらず、2019 年の幼児は動作習得が停滞していることが明らかとなった。
髙橋文子	記憶画再考論－主観的幸福感の向上を促す象徴的記憶画研究－
大西　斎	初等・中等学校における教員の教育の自由に対する法的一考察
森下一成	域学協働で日本語を学ぶ留学生のコミュニティへの帰属意識とキャリアの方向性 –日本語ボランティア団体・伊都インターナショナルの活動を通じて–
田中真奈美 （馬場智子（学外）、吉田直子（学外））	外国人児童生徒のノンフォーマル教育選択と進学―多民族社会米国・タイからの示唆
	民族的・言語的マイノリティ児童生徒の教育選択の対応、子どもの学習権を保障する方法について、米国とタイのモデルから、ノンフォーマル教育選択の可能性と学校教育への接続へのモデルを抽出し、日本での法的制度化の必要性を明らかにし、学校教育法改正の基礎資料を提供することを目的とした研究である。
鈴木哲也	理科教育における倫理的・法的課題に関する基礎的研究
	理科教育における特に動物利用に注目して、生命倫理・環境倫理・動物倫理の立場及び民法や動物の愛護及び管理に関する法律をもとに、課題となる点を分析し指摘した。

発表風景：B-321 教室（心理系）

発表風景：B-327 教室（非心理系）

その他の特別研究助成研究テーマおよび概要

研究代表者氏名 （共同研究者）	題目・概要
及川留美	地域型保育教材に関する基礎的研究ー沖縄のエイサーに着目して—
	地域の文化や伝統に親しむための保育実践について評価するための評価指標作成に向けた基礎的研究として、沖縄本島にある保育施設のフィールドワークを実施した。地域芸能であるエイサーを保育に効果的に取り入れている実践の様子が観察された。
小林久美	子どもの衣服の安全性に関する教育者・保育者の認識
	教育者・保育者の衣服におけるヒヤリ・ハット体験、衣服の選び方、洗濯洗剤の選び方、子どもの衣服の選び方などについて、アンケート調査を実施した。
小林祐一	教員養成のカリキュラムとテキストの分析
	小学校教員を目指す学生の学びについて聞き取り・追跡調査を実施した。多くの学生が教員採用試験や主要５教科（国語・数学・理科・社会・英語）のテキストを活用し、不安を抱えながら学習している実態がわかった。
佐々木由美子 （相澤京子）	紙芝居評論の確立にむけて一名作紙芝居の比較検討ー
	本研究では紙芝居評論の確立にむけて、童話等の原作をもつ紙芝居作品をとりあげ、絵や脚本について比較検討をしていくとともに、紙芝居独自の表現とは何かについて明らかにしていきたいと考えています。
篠原　俊明	生活リズムカードの導入が児童の生活習慣に及ぼす影響—昭島市の取組について—
	1 年生から 6 年生までの児童 4.,900 名を対象に目標起床時刻を設定し、その達成回数と生活習慣との関係を捉えた。達成回数が多いほど、運動や朝の排泄をする傾向があり、逆に、学校で眠くならないことが明らかとなった。
島内晶	高齢期における記憶の失敗経験がメタ記憶に及ぼす影響についての検討
	自分の記憶に対する肯定感は、高齢者の精神的健康を維持する上で重要である為、本研究では、メタ記憶（自分の記憶に対する認識）と記憶の失敗経験との関連について検討し、それらと精神的健康との関連を検討する。
出口保行	攻める防犯理論を確立するための実踏調査
	安心安全な子育てに欠かせない地域防犯に関して、ビューティフルウィンドウズ運動展開の際のモデルとした京都府の実態を実踏調査し、今後の足立区のみならず東京都全体の防犯施策立案の参考とすることを目的とした。
埴田健司	他者との関係が自己制御機能に及ぼす影響—関係所属動機に着目した検討
	他者との関係性の状態によって自己制御が影響を受けるかについて検証した。実験 1 では他者からの排斥によって自己制御が困難になるか、実験 2 では他者から応援のある状況で自己制御が促進されるかを検討した。

編集後記

今年度の特別研究助成研究発表会は、心理系の会場とその他（非心理系）の会場に分けて実施しました。各会場で分けて実施することで参加人数が少なくなりましたが、その分、質疑応答などで参加者相互の交流が深まっていたように感じます。大学の教員数も少しずつ多くなり、お互いにどのような研究をしているかを知らない状況もあるようです。今後は、科研費や特別研究費の助成を受けた研究内容のみならず、先生方のその他の研究内容を少しでも多くニュースレターなどで紹介していきたいと思います。研究推進委員長　小林久美